

# 肝癌、胆道癌、膵癌における高転移能を反映する病理組織学的因子の網羅的検討に関する研究

## 1. 研究の対象

2008年1月から2019年12月に当院で肝癌、胆道癌、膵癌の手術を受けられた患者

## 2. 研究目的・方法

従来から肝臓癌、胆道癌、膵癌の治癒切除症例の術後の治療方針を決定する最も重要な因子は、深達度とリンパ節転移からなる進行度分類です。しかしながら高い再発率である悪性度の高い癌であることから再発リスク予測の重要性が増している現状では、治療選択の指標は進行度分類では十分とは言い難く、より再発の危険性を鋭敏に反映する悪性度分類の確立が求められています。本邦では主組織型や脈管侵襲など各種癌取扱い規約に記載のある病理学的因子に基づく現状にあります。これらの因子には、進行度分類に比して予後分別能が低く、また客観的診断基準が乏しいという欠点があります。

一方で、近年、上皮間葉転換(epithelial-mesenchymal transition:以下、EMT)が腫瘍の浸潤・転移能を向上させ、治療耐性を誘導することが数多くの基礎研究で明らかにされています。当教室では、EMTの重要な過程と考えられる脱分化の指標(簇出や低分化胞巣等)およびEMT成立に必要な癌微小環境構築の中心的な役割を果たしている癌関連線維芽細胞(cancer-associated fibroblasts: CAFs)と、これらにより誘導される線維性癌間質等に注目し、腫瘍先進部に現れるこれらの所見が、既存の進行度分類や臨床病理学的所見を凌駕するほどに、大腸がんの腫瘍悪性度を鋭敏に反映することを示してきましたが、このような分類を肝癌、胆道癌、膵癌で検討したものは認めません。また、EMTに関する新たな病理学的因子が治療抵抗性に関連するかどうか、これらの因子の分子生物学的背景についても十分には明らかにされていません。

そこで、本研究では肝癌・胆道癌・膵癌を対象に、高転移能を鋭敏に反映する病理組織学的因子の検索を目的とします。また、その臨床的意義と分子生物学的背景の解明についても検討を行います。本研究により、将来的に各種癌取扱い規約に掲載され、日常的に汎用される病理組織学的所見が見出される可能性が期待されます。

研究期間は倫理委員会承認後から2022年12月31日までの約4年間を予定しています。

## 3. 研究に用いる試料・情報の種類

情報：治療前後の採血結果(腫瘍マーカーなど)・術前診断(画像や内視鏡所見)、手術の内容、病理検査結果、手術後の経過、手術後の治療内容等

試料：手術で摘出した組織標本

#### 4. お問い合わせ先

本研究に関するご質問等がありましたら下記の連絡先までお問い合わせ下さい。

ご希望があれば、他の研究対象者の個人情報及び知的財産の保護に支障がない範囲内で、研究計画書及び関連資料を閲覧することが出来ますのでお申出下さい。

また、試料・情報が当該研究に用いられることについて患者さんもしくは患者さんの代理人の方にご了承いただけない場合には研究対象としますので、下記の連絡先までお申出ください。その場合でも患者さんに不利益が生じることはありません。

照会先および研究への利用を拒否する場合の連絡先：

研究責任者：

〒359-8513 埼玉県所沢市並木3-2

防衛医科大学校病院 外科 永生高広

TEL：04-2995-1511（内線 2356）